

2010年11月1日発行

江戸遺跡研究会会報 No.124

江戸遺跡研究会

<http://www.ao.jpn.org/edo/>

江戸遺跡研究会 第127回例会のご案内

日時：2010年11月17日（水）19:00～

内容：石井たま子氏（テイケイトレード株式会社）
「新宿区市谷薬王寺町遺跡の発掘調査」（仮題）

会場：江戸東京博物館 学習室2

交通：JR総武線両国駅西口改札 徒歩3分
都営地下鉄大江戸線両国駅（江戸東京博物館前）A4出口 徒歩1分

問合せ：東京大学埋蔵文化財調査室（堀内・成瀬） 03-5452-5103

江戸遺跡研究会公式サイト

<http://www.ao.jpn.org/edo/>



◇江戸遺跡研究会第126回例会は、2010年7月21日（水）午後7時より江戸東京博物館学習室2にて行◇
◇われ、石崎俊哉氏より以下の内容が報告されました。◇

東京都港区愛宕下遺跡（港区No. 149）発掘調査経過報告

石崎 俊哉

（東京都埋蔵文化財センター）

1. 遺跡の概要

本遺跡は、環状第二号線新橋・虎ノ門地区第二種市街地再開発事業に関わる埋蔵文化財発掘調査である。調査対象地は、現行の東京都港区新橋四丁目・同西新橋二丁目・同虎ノ門一丁目に所在し、第一京浜（国道15号線）から桜田通り（国道1号線）までの区間で、直線距離にして約980m、環状第二号線工区幅において約40mの範囲である。発掘調査は、平成16年（2004）1月30日に開始し、概ね新橋寄りの地点より進行し、現在虎ノ門一丁目再開発地区を主体に継続中である。全調査対象面積は約29,000㎡であり、平成21年度末時点で60地点、約23,000㎡の調査を完了している。

当該地域は、武蔵野台地末端の丘陵である愛宕山（標高約26m）の東側に広がる低地にあたり、江戸時代は概ね「愛宕下」と呼称された地域である。この低地は、「日本橋台地」（本郷台地が浸食され形成された埋没地形）西側に位置する「丸の内谷」と呼称される埋没谷の沖積地の一部として形成されたと理解されている。本調査地の現表標高値は、第一京浜付近2.7m、赤レンガ通り付近2.2m、日比谷通り付近3.1m、愛宕通り付近4.4m、桜田通り付近5.6mであり、汐留再開発地区から日比谷通りまでは概ね比高差の少ない平坦面を呈し、日比谷通り以西は愛宕山へ向け緩い勾配を示す。周辺の既往の調査遺跡は、港区No.19遺跡（港区西新橋二丁目：港区遺跡番号19）、天徳寺寺域（港区虎ノ門三丁目：同14）、などがある。

環状第二号線範囲を江戸時代の絵図である『御府内沿革圖書』に照会すると、東から概ね、東海道筋の源助町から広小路通（愛宕下大名小路：現赤レンガ通り）に至る区画（便宜的に「芝口地区」と呼称する：以下同じ）、広小路通を経て神保小路と薬師小路に挟まれる区画（「愛宕下地区」）、愛宕下通（現愛宕通り）を経て三斎小路を含む藪小路と鎧小路に挟まれる区画で西久保通（現桜田通り）に至る範囲（「西久保地区」）に該当する。

天正十八年（1590）徳川家康の江戸入府当時は、上記「日本橋台地」を基盤とした「前島」と呼ばれた砂州と、埋没谷を母体とした「日比谷入江」と呼ばれる入り江が海手に広がる景観を呈していたようである。家康入府以降、江戸城の築城とともに都市江戸の整備が進められる。文禄元年（1592）江戸城西の丸造営を契機とする日比谷入江の埋め立てをはじめとし、慶長八年（1603）には神田山の切り崩しによる沿岸域の埋め立てが行われるが、この一連の沿岸域の造成過程において、愛宕山東側低地の市街地も整備されたと判断される。江戸初期の町割りを伝える最も古い江戸図の一つである「武州豊嶋郡江戸庄図」（寛永九年）からは、当該地域が当時既に大名屋敷・旗本屋敷などの武家屋敷を主体とする市街地として整備されたことが窺われる。以後の江戸図からも屋敷替えの変遷が見られるものの、明治維新まで武家地として利用される。

江戸全般を通し当地に屋敷を構えた諸家は、大名二十九家、旗本九十二家、御家人一家、医師一家などへの

ぼる。旗本の中では源助町付近の本堂家屋敷が特徴的で、拝領以来より一貫して大きな変化がない。本堂家は、常陸（茨城県）新治郡志筑を所領とし、石高 8000 石、大名に匹敵するほどの家格の大身旗本で、交代寄合として参勤交代を許された。

当該地区における大名の主な拝領屋敷は、以下のとおりである。

【芝口地区】 広小路通から東海道筋までの区画：赤レンガ通りから第一京浜までの街区

長門国清末藩毛利家上屋敷（寛政十年-1798-拝領）

備前国岡山藩池田家下屋敷（寛政四年-1792-拝領）

【愛宕下地区】 愛宕下通から広小路通に挟まれる区画：愛宕通りから赤レンガ通りまでの街区

下総国高岡藩井上家屋敷

上総国荻谷藩堀家屋敷（拝領年不詳：元禄二年-1682-上地）

遠江国掛川藩大田家屋敷

下総国佐倉藩堀田家屋敷

陸奥国一関藩田村家上屋敷（寛文九年-1669-拝領）

【西久保地区】 西久保通と愛宕下通に挟まれる区画：藪小路付近

肥後国宇土藩細川家上屋敷（拝領年不詳：元禄十六年-1703-上地）

丹波国篠山藩松平家上屋敷（元禄十六年拝領）

近江国水口藩加藤家屋敷（正徳二年-1712-拝領）

【西久保地区】 西久保通と愛宕下通に挟まれる区画：三斎小路付近

信濃国松本藩松平（戸田）家中屋敷（宝永五年-1708-拝領：拝領時は美濃国加納藩）

信濃松代藩真田家屋敷（天保～嘉永三年拝領）

周防国徳山藩毛利家屋下屋敷（明暦四年-1658-拝領か）

明治維新以後、東京府の成立とともに、当該地区の行政区画も変更される。明治七年（1874）の大区小区制により、「第二大区二小区」に属し、何れも明治五年（1872）に起立した町である、「愛宕下町二丁目」、「田村町」、「西久保桜川町」、に含まれる。上記、清末藩毛利家屋敷跡には、明治五年私塾である勸学義塾が創設される。

明治十一年（1878）郡区町村編成法により「芝区」に属するが、町名の変更はない。昭和七年（1932）関東大震災後の市区改正により、町名としては「新橋四丁目」、「田村町四丁目」、「田村町」、「西久保桜川町」、に含まれる。以上が、昭和二十二年（1947）までの当該地区の大まかな変遷である。

2. 愛宕下遺跡の堆積層と江戸低地の造成

江戸の沿岸域の原風景は、「江戸前島」と呼称される半島状の砂州と、その西側に位置し江戸城直下まで深く入り込む「日比谷(の)入江」に代表される。地盤高図を参考にすると、前者は本郷台地から南に連続する台地が波の浸食により形成された波蝕台（埋没地形である「日本橋台地」と呼称）を基盤として形成され、また後者は河川の浸食作用で形成された開析谷（「丸の内谷」と呼称）を基底とする（貝塚爽平『富士山はなぜそこにあるのか』1990 丸善株式会社）。徳川家康の江戸入部（天正十八年-1590-）以後、江戸城の造成と合わせて都

市江戸の基盤整備として沿岸域の埋め立て造成がおこなわれる。愛宕下武家地の整備もこの一環であることは十分想定でき、環状第二号線はまさにこの日比谷入江の開口部付近を横断する位置にあると言える。

本調査区の標準的な土層（整地層）堆積は、関東大震災による被災層を含む明治以降の盛り土を表層とし、以下概ね5層に区分できる。幕末～明治面（1面）を構成する整地層（Ⅰ層）、焼土層などで上層と区分される面（2面）を構成する暗褐色粘質整地層（Ⅱ層）、上部で宝永四年富士噴火（1707）による降下火山灰層が被覆する整地面（3面）を構成するローム質粘質ブロックを基本とする整地層（Ⅲ層）、黒色粘質土層（Ⅳ層）、暗オリーブ灰色粘質土層（Ⅴ層）である。

Ⅰ～Ⅲ層は、焼土層および中間位置での礎石の存在などから複数に区分が可能である。Ⅲ層は、調査区全域においてほぼ認められ、年代的な位置付けを含め鍵層となる。また、Ⅲ層を構成するローム層は低地域では認められないことを考慮すると、台地部分の切り崩しにより搬入されたものと理解され、大規模な造成のあったことを物語る。

Ⅳ・Ⅴ層は、自然堆積（沖積層）と理解され、Ⅴ層下部は砂層および砂礫層が堆積し、地点によっては間層として貝殻の堆積が確認される。Ⅳ層以下の確認位置は地点により異なるが、概ね現表から1.7～2.8mの深度で確認される。愛宕山周辺では砂層を基層とし、愛宕通り以東赤レンガ通り付近まで概ね現表の傾斜でⅣ・Ⅴ層面が確認されるが、赤レンガ通り―柳通り間ではⅣ・Ⅴ層は非常に薄くやや浅い位置で砂層が認められる。柳通り以東では、第一京浜に向け砂礫層がやや深くなる傾向がある。

Ⅳ・Ⅴ層面で確認される遺構には木片を非常に多く含む溝状遺構、ピット（杭を伴うものもある）、土坑などがある。特に、溝状遺構を被覆するⅢ層最下部のローム質シルト層は、出土陶磁器・土器の様相から江戸初期の低地造成に関わる整地を示唆し、さらに多量の木片の意義としてこれら溝状遺構が初期造成における駆水を目的とした施設と想定している。

『東京市史稿』変災編に所収される被災記録のうち、愛宕下周辺に関する主な火災は以下である。中でも、寛永十八年大火、明暦三年大火、寛文八年大火、享保年中火災、寛政六年大火、文政四年大火は、整地層中で確認される焼土層および焼土粒を理解するうえで、出土遺物（陶磁器）の年代観とあわせて重要である。さらに、元禄十六年震災はⅢ層を構成する整地層の最上部を形成する要因と推測するものである。

寛永十八年(1641)大火：正月晦日京橋桶町より出火。南は宇田川橋、東は木挽町、北は御成橋、西は麻布辺りまで延焼する。記事には被災した大名・旗本が列記されており、当該地域の居住者の名も多く認められる（『寛永日記』）。

慶安五年(1652)火災：二月二十八日山手より出火。「西窪をへて芝邊まで延焼」する（『敵有院殿御実記』）。

明暦三年(1657)大火：正月十九日壬戌巳上刻伝通院より出火。小石川焼亡。「其外諸大名衆以下町々、南ハ金杉橋際札ノ辻近所ニ至リ、西ハ糶町一丁目ヨリ溜池マテ、東南ハ愛宕ノ下残ラス、(略) 焼亡ス」（伊達家『治家記録』）。

正月十九日宵鞠町五丁目より出火した火勢は、「西の丸下に至りて、(略)、櫻田の町屋に焼けうつりて、すぐに愛宕の下、大名小路へうちつゞく」とある（『むさしあぶみ』）。

寛文八年(1668)大火：二月朔日「牛込ニテ酒井修理太夫殿下屋敷ヨリ火出、(略) 御門ノ外、田中大隈殿・谷内蔵殿・同出羽殿・内藤左京太夫殿・木下右衛門殿・朽木彌五左衛門殿、何れの上屋敷不残焼ル。久保町・備前町ヨリ東へ不残、新橋ヨリ東南へ不残、金杉橋之邊マテ焼行、愛宕之下ニテ、片岡三郎四郎殿・伊奈内蔵殿屋敷残り、愛宕山、同下ニテ大名小名屋敷不残焼、増上寺裏門脇寮焼、本堂三門斗残り、金杉ニテ留ル。残タル屋敷、西ノ久保四辻ヨリ北へ、天徳寺・朽木彌五左衛門殿邊残り、(略)」（『寛永延寶略日記』）。

元禄十六年(1703)震災：十一月廿二日「今夜八ッ時過江戸大地震」(会津藩『家世実記』)。

享保二年(1717)大火：十二月二十八日「廿八日申の刻には火口六七ヶ所になり、虎の門外・あたごの下の方・藪小路・増上寺北の方より、海手の方へ焼貫申候。松平出羽守殿御屋敷・同陸奥守殿海手の御屋敷・諏訪肥後守殿御屋敷、此外諸旗元衆の屋敷は數不知」(『月堂見聞集』)。

享保四年(1719)火災：二月十四日「同夜亥ノ刻、愛宕下田村下総守中屋敷ヨリ、遠山七郎右衛門・安部益庵・石野三次郎・下曾根新六郎等屋敷類焼」(『柳營日録』)。

享保十二年(1727)大火：十二月十日「同十日七ッ半過、表二番町御旗本方ヨリ出火、(略)黒田殿安芸殿虎の御門ハ残り、内藤能登守殿ハ焼、此火前堀ノ向ヘ飛、町屋敷焼、藪小路之邊左右焼、天徳寺之手前愛宕下ノ下ヘ出、松平隠岐守殿・藤掛民部殿・長谷川周防殿、山下通焼、増上寺境内残り、東ハ陸奥守殿御屋敷焼、宇田川橋ヨリ南ヘ神明御本社残り、(略)」(『月堂見聞集』)。

明和九年(1772)大火：二月二十九日目黒(行人坂大円寺)より出火。

寛政六年(1794)大火：正月十日麴町五丁目酒屋より出火。「糒丁四丁目油屋ヨリ出火、(略)御郭外へも焼出、藤堂肥後守ヨリ、京極家、久保丁通り、脇坂淡路守・松平陸奥守両屋敷、芝口二丁目迄、海手限。」(『森山孝盛日記』)。

文政四年(1821)大火：正月十七日「十七日、西北風大ニ烈シ、晝後止ミ、東南風ニ替ル。酉刻、柴井町ヨリ出火、同朋町邊焼失ス。子刻ニ及テ火消ス。」(『続日本王代一覽後記』)。

3. 遺構と遺物

各調査地点で確認される武家屋敷を構成する主な遺構として、建物施設【礎石建物(礎石・礎石基礎)・土蔵(胴木・基礎杭)など】、上水施設【竹樋・木樋・継手・桶・榊など】、排水施設【木組溝・石組溝(間知石・円礫)など】、埋設施設【埋桶・埋榊(地下室含む)・埋甕・土器皿埋納施設など】、構築施設【屋敷境石垣・池跡・石組遺構・木組遺構・瓦組遺構・杭列など】、および土坑(廃棄土坑含む)・溝などの諸施設が見られる。

池跡は、屋敷空間に比して小規模のものが多く、護岸構造としては、杭、杭・柵、石材(円礫・間知石)などである。

屋敷境界施設は、溝、石垣、石組溝などが認められる。石垣・石組溝は、間知石による。

芝口地区 特徴的な遺構では、環状第二号線工区南縁に位置する道路(区道 41 号線)の北側街区に沿う間知石組みの排水溝(溝幅想定 1 間)が挙げられる。この溝は、本堂家屋敷、備前岡山藩池田家下屋敷(旗本佐々木家→蜂屋家→寛政四年拝領)、長門清末藩毛利家上屋敷(旗本仙石家→宇津家→寛政十年拝領)の南縁を区画し、「武州豊嶋郡江戸庄図」に描かれる往還沿いに既に存在したものと考えられる。排水溝の石垣を構成する間知石は、大きさ(面・控え)および積み方が下段と上段とで異なり、これが構築時期の差を示すと判断される。さらに、各屋敷内の上水・排水施設(木樋・竹樋：木組溝・石組溝)との接続も確認されることから公的な意味合いをもつ集合的な排水施設と理解される。また、本堂家屋敷西縁を区画する屋敷境は間知石組み石組溝であり、胴木ともに往還沿い石組溝との連続性が認められた。

出土遺物では、本堂家屋敷および宇津家屋敷出土陶磁器が注目された。前者は、中国龍泉窯系青磁刻花唐草文壺(15 世紀)、中国シヨウ州窯系呉須赤絵鉢(16~17 世紀初)、同染付鳳凰唐草文三足鉢(16~17 世紀初)、灰釉短径壺(猿投窯：8 世紀末)、須恵器高台付皿(常陸産か)などの出土が認められ、本堂家の嗜好の一端を垣間見せる資料である。

後者は、鍋島焼の良好な資料が出土した。種類は、染付皿が最も多く、色絵小皿数個体、染付猪口 2 個体などがある。皿は、口径 30cm を越える大皿も認められ、また同一文様でも呉須の発色の微妙な違いなどで別個

体と判断され、複数枚が組みとしてあったと推定されるものもある。宇津家は、小田原藩三代藩主大久保忠朝ただともの子息教信のりのぶが元禄 11 年 (1689) に興した旗本家である。教信の祖父である二代大久保忠織ただもとと鍋島忠直ただなお (佐賀藩二代藩主光重の父) の妻が姉妹であることから、両家は親密な姻戚関係をあったと考えられる。出土した鍋島焼は、このようなつながりのなかで宇津家にもたらされたかと判断される。

愛宕下地区 陸奥国一関藩田村家上屋敷 (寛文九年拝領) は、本区画の東端に位置し、表門が広小路 (赤レンガ通り) 側へ向く。赤レンガ通りに面する調査区では、櫓基礎が確認された。イタリアのフォトジャーナリスト F・ベアト撮影の「愛宕山より見た江戸のパノラマ写真」(慶応元年 (1865) 頃の姿:『幕末写真帖』より 東京都写真美術館所蔵) と対比すると、この櫓基礎は概ね表門付近であることがわかる。隣接する他の調査区では、礎石建物、排水施設である間知石組み石組溝が良好に認められ、廃棄土坑も比較的少ない。また、この地点ではⅢ層を構成する関東ロームを主体とする整地層が重層的に堆積する状況が観察された。

田村家以外の諸家屋敷は、表玄関を北向きとする (神保小路に面する) 一群と南向きとする (薬師小路に面する) 一群に分割できる。従って調査区は各屋敷の裏手を対象とし、屋敷境を示す境界施設 (石組溝・木組溝・溝など) が比較的良好に残り、特に No.149-40-2 地点では 4 屋敷の屋敷境に対応する石組溝・木組溝が確認された。

本地区では、遺構確認面最下層に当たる沖積粘質土層 (Ⅳ・Ⅴ層) および砂層を掘り込む溝・土坑が良好に確認された。覆土は非常に粘着性の高い土で、木片 (製品含む) を多く含む特徴がある。これら溝状遺構は、概ね江戸図に描かれる往還に対して平行もしくは直行方向に配置され、出土陶磁器においても江戸時代初期の様相が窺われることから、当該地区の初期造成に関わる遺構と理解している。

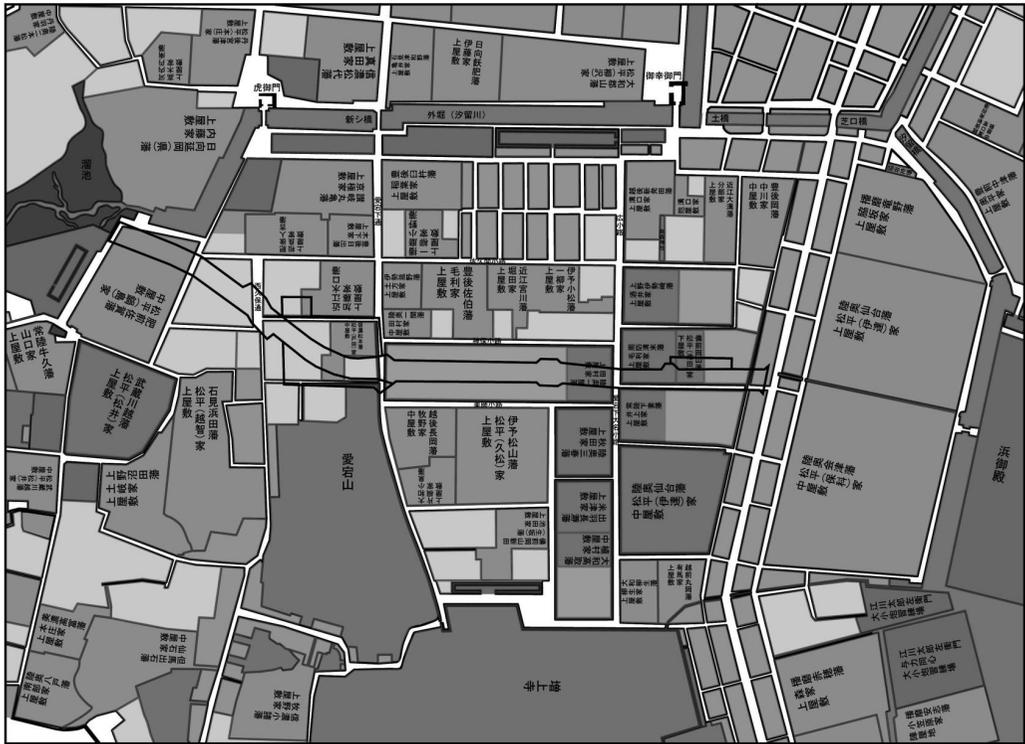
西久保地区 当該地区は江戸期を通じ旗本家屋敷が多く、青木家 (甘藷先生: 青木昆陽)、狩野家 (御用絵師)、遠山家 (北町奉行: 遠山影元) などの名も見られる。主な大名屋敷では、信濃松本藩松平 (戸田) 家中屋敷宝永五年拝領: 拝領時美濃加納藩、信濃松代藩真田家屋敷 (天保～嘉永三年拝領)、および周防徳山藩毛利家下屋敷 (明暦～寛文年間)、大和小泉藩片桐家中屋敷 (寛文～延享年間) などである。

本地区は、愛宕山北側の裾近辺で、Ⅳ・Ⅴ層が極めて薄い (もしくは存在しない) 状況があり、下位の砂礫層が浅い地点で確認される。この体積状況については検討が要されるが、愛宕山周辺の旧地形復元に重要な情報と考えている。また、自然木等も含む自然流路と判断される溝状の遺構が確認され、出土遺物の中には縄文中期後半代の土器の混入が見られた。また、自然砂層面付近においては土師器など古代の土器の出土があり、これも含め愛宕下エリアにおける古代・先史の状況を示す一端が垣間見られた。

当遺跡の調査は、延長距離約 1km、幅約 40m、にもおよぶトレンチ調査である。このトレンチ調査のなかで主眼とする主なテーマを列記すると以下にまとめることができる。

- 1 江戸海手低地における古環境の復元
- 2 日比谷入江の埋め立てと合わせ江戸初期造成の復元
- 3 武家屋敷の境界施設と各武家屋敷の変遷
- 4 武家屋敷内諸施設の空間配置
- 5 幕末明治期の土地利用の変遷

武家地（幕府関係等）
 武家地（大名藩邸）
 武家地（旗本等屋敷）
 寺社地
 町地
 黒枠：環状第二号線新橋・虎ノ門再開発範囲



第2図 幕末期（文久年間）の愛宕下の町割り 出典江戸復元図（東京都教育委員会1989）



第3図 事業域と愛宕下遺跡（港区No. 149遺跡）調査対象範囲

原因 内務省地理局明治二十年「東京実測図」
 東京都港区立三田図書館 1976 『近代沿革図集新橋・芝公園・芝大門・浜松町・海岸』より作成

「平太弐十そう」とは何か？

- 江戸遺跡研究会第24回大会参加記によせて -

鳥越 多工摩

筆者はこれまで江戸遺跡から検出される穴蔵を扱ってきた [鳥越 2007]。その中でまだ着手していない問題として、穴蔵成立期（1660年代末 - 80年代頃）の様相の解明がある。穴蔵の構築に造船技術が使われていることはよく知られているものの、当該期の造船事情がほとんど不明なためであった。

ところが今回の大会で、当該期の造船事情に繋がる手がかりを得ることができた。それが、表題にもある「平太弐十そう」である。

「平太弐十そう」を重要だと見なした理由は、今回の大会に対する筆者なりの評価に連なっている。そこで、筆者が今回の大会をどのように評価したのかということについてから述べることとする。

江戸城・城下町建設に伊豆石が大きな役割を果たしてきたことはよく知られている。そして1980年代後半から急速に増加した江戸遺跡の発掘は、とりわけ江戸城石垣の実態解明に大きな知見を与え続けてきた。石垣の構造や構築方法はもちろんのこと、石垣石に刻まれた刻印の分析から工程が復元され、さらには工事体制の解明が行われてきた。

一方、生産地側では近年、石丁場の調査や報告書の刊行が盛んになっている。生産地側での調査・研究の進展は、石丁場遺跡研究会の結成を見るにまで至った。石丁場遺跡研究会の結成は、生産地側での調査・研究のひとつの到達点であり、出発点でもある。

両地域における調査・研究の進展が、「両地域の関係性が問われてくる」[梶原 2010]ということに目を向けさせたのは自然な流れであった。今回の大会が江戸遺跡研究会と石丁場遺跡研究会との合同開催となったのは、その象徴であると言える。

「両地域の関係性」を問う出発点は、石材の生産→搬出→搬入→石垣構築までの一連の流れを概観することにある。個々の具体的な分析は、流れの概観があつてはじめて意味を成すためである。そして、その役目を果たしたのが白峰旬氏と金子浩之氏の発表であった [金子 2010、白峰 2010]。

もとより企画者が白峰氏の発表に与えた意図は、用語を史料から再整理することにあつた [梶原 2010]。流れの概観自体はすでに北原糸子氏の論考に詳しいためである [北原 1994・1995・1999]。

だが白峰氏の発表は、最終的に「石場（石切丁場）と普請丁場だけが重要なのではなく、石の陸揚げ・水揚げをおこなう石上場、普請丁場に石寄せをする前にいったん石をキープしておく石置き場」 [白石 2010] が重要であったこと、その場所は「霊岸島」「こさい嶋」「銭糞橋」であったことを明らかにした。これは石材輸送フローの更新と言うべき成果であり、おそらくは企画者の意図を超えた成果であった。

金子氏の発表では、石材輸送フロー中の海上輸送に焦点が当てられている [金子 2010]。金子氏の発表は、北原氏の論考を下敷きに、生産地側の考古学上の知見や生産地側に残された史料を基に組み立てられている。史料からではイメージしづらい石材輸送フローの各イメージが、具体的な事例を基に組み立てられたものと言えよう。

その代表例が、「海岸の岸壁そのものが丁場にされている例」 [金子 2010] の提示に伴う石材輸送フローの更新である。岩礁性の海岸には江戸へ石材を運ぶ船（石船＝石材運搬船）を接岸させることは難しいとし、そのような丁場では石材をいったん別の海岸・港へと運んでから石船に積み替えた、ないしは沖合に停泊した石船まで運んだことが想定されている。

この丁場例は近世中後期のものであるため、それを近世初頭の事例にあてはめることは難しいとしている [金子 2010]。だが近世初頭に海岸で採石していたという史料があることから、別の場所で石材を積み替えたというプロセスは確かにあり得る [金子 2010]。

金子氏は、「石材を江戸へ運ぶ具体的な船の姿や派生する問題点などについての研究蓄積がまだまだ薄い点にある」 [金子 2010] ことを問題点として挙げている。石材の積み替えという指摘は、この問題点に対するひとつの回答でもある。

白峰氏・金子氏の発表は、石材輸送フローを更新したという点で、研究史上の一大成果であると考えられる。両者の提示したフローは、石材搬出・搬入のモデルケースとして広く使われることになるだろう。

両者の発表をこのように評価する一方で、気になった点もある。それは、石丁場 - 積み替え場所間の石材運搬に関する項目（「(3)「平太船」の存在 - 磯浜での石材の搬出 -」 [金子 2010]）である。

金子氏は磯浜からの石材搬出に「水押も船底も平な形状の船」 [金子 2010] が使われたとし、そのための船としてヒラタ（艀、平田、平太などと書く）が想定されている。この想定は、熊本藩主細川忠利が江戸留守居役に送った書状（寛永 11 年・1634）の中に「平太式十そう詔候由得其意候、是又跡より之ふしん奉行相談可仕候、其上又数を可申付候事」 [北原 1995] という一文があることによる。そこから「細川家は寛永 11 年段階で伊豆の石丁場から効率よく江戸へ運ぶための準備として、石船とは別に艀船を二十艘用意していた事実が読み取れる」 [金子 2010] としている。

筆者が気になったのは、①石船とヒラタとが別種の船として捉えられていること、②寛永 11 年に細川家が「伊豆の石丁場から効率よく江戸へ運ぶために」「艀船を二十艘用意していた」と判断されていること、の2点である。

とりわけ2点目は、石材輸送フローに関わる大きな問題である。

前述したように、岩礁性の海岸から本船に石材が運ばれた可能性や、そのような運搬にヒラタが使われた可能性はある。細川家はその時に使った船をヒラタと呼んだ可能性もある。

だが、北原氏が提示している史料からは [北原 1995]、伊豆でヒラタが使われたと判断することができないのである。

では、ヒラタとは何か。

発表では、「水押（筆者註：みおし／みよし）も船底も平な形状の船」の具体的な形態として「幅の広い船底材を用いて船舷板は一枚程度」の「喫水の浅い構造の船」が想定されている [金子 2010]。

水押は舳（へさき）として用いられた部材であり、通常は一本水押を指す。その形状は有り体に言えば棒状であり、船首平面形は V 字状ないし Y 字状を呈する。金子氏の言う水押が一本水押ではなく舳を意味しているとするならば、「水押も船底も平な形状の船」とは舳の幅と船底の幅がほぼ等しい船か、船体平面が楕円形ないし卵形を呈する船であろう。舳はおそらく立板造であり、船首平面形はコの字状ないしは開いたコの字状を呈する。舳（はしけ）ないし筏（いかだ）のような船が想定されよう。

そもそもヒラタとは川船の種名である。ヒラタの名を持つ川船は全国で見られ、構造や大きさは地域・流域によって違いが見られる [川名 2003・2005]。

ひとつの地域・流域内ですら、いくつかの種類が見られる。時期は下るが、享和 2 年（1802）の奥書を持つ『船鑑』という幕府文書がある【註 1】。そこには、ヒラタの名を持つ船として「修羅船・石積船（ヒラタ、石舟）」「土船（土舟）」「舳船（土舟）（筆者註：はしけひらたふね）」「中船（土舟、鬼丸）」「中船（見沼通船）」「船（川越ヒラタ）」「船（上州ヒラタ）」が収録されている [川名 2003]【図 1】。

『船鑑』からは、ヒラタの積載物は多種多様であること、それに伴って呼び名もさまざまであることがわかる。逆に、積載物に関係なくヒラタと呼ばれていたであろうこともわかる。例えば「修羅船・石積船」は「俗ニ ヒラタ 石舟 ト云」「但板子無之ヲ修羅造船ト云」なのである【図 2】。

ここで改めて寛永 11 年の忠利書状に立ち返ってみる。

寛永 11 年の忠利書状には「十一月十一日之書状同廿八日ニ見候」という記述がある。「平太式十そう」が用意されたという報告は 11 月 11 日付・江戸屋敷発の書状で国元に伝えられたのである。同年 10 月 18 日付・江戸留守居役宛の忠利書状には「石運搬の平太舟の手配を急ぐことなどが触れられている」[北原 1995] という。「平太式十そう」を揃えたという江戸屋敷からの回答は、10 月 18 日付・忠利書状に対応しているのである。

伊豆で切り出された石材は、寛永 12 年 4 月から 8 月にかけて江戸へと運ばれた。この時に使われた船は、国元で選ばれた十反帆船から十三反帆船までの船 31 艘であった [北原 1995・1999]【註 2】。したがって、石材運搬の船は国元と江戸の両方で用意されたことになる。確かに、細川家は「石船とは別に船を二十艘用意していた」[金子 2010] のである。

問題は、「平太式十そう」が石材輸送フローのどのプロセスで用いられたのかということである。つまり、伊豆で用いられたのか、江戸で用いられたのかということである。

寛永 11 年の忠利書状は、内容から「一．外堀普請の内容」「二．伊豆石場での石調達」「三．江戸屋敷での諸処置」に大別され、「平太式十そう」は 3 番目のグループに属する [北原 1995]。3 番目のグループは石上場・普請小屋確保の確認など江戸での作業にかかわっている。となれば、「平太式十そう」もまた江戸での作業のために用意されたのであり、白峰フローにおける石上場→石置き場→

普請丁場間の石材運搬に用いられたと考える方が妥当なのではないだろうか。

もし「平太式十そう」が伊豆で使われていたとするならば、それを補強ないし示唆する史料が必要であろう。

筆者が「平太式十そう」に注目したのは、「平太式十そう」が穴蔵の成立を考える上で重要な役割を果たすと考えるためである。

穴蔵の構築には上方系の造船技術が用いられている [鳥越 2007]。中世の瀬戸内で成立したローカルな技術は、上方系廻船（とりわけ弁財船）の全国展開などを通じて、17世紀初頭前後から18世紀初頭頃にかけて各地で受容されていった [安達 1985、石井 1995 など]。穴蔵は、江戸における上方系造船技術受容のひとつのあり方なのである。

だが、江戸における上方系造船技術の受容過程や受容時期には不明な点も多い。とは言うものの、ヒントがないわけではない。例えば延宝5年（1677）の江戸や松戸には、摂津大和田村出身の船大工が居住していたことが判明している [船杉 1999・2000]。そこから、摂津大和田村や佃村の漁民が江戸に下ってきたときに、船大工も一緒に下ってきたであろうことが想定される【註3】。

佃島漁民後の江戸の造船事情をうかがわせる出来事として、南部藩が慶安3年（1650）に行った藩船2艘（「二成之御米船」）の建造がある。この2艘の建造は、江戸から下ってきた3人の船大工が担当している [渡辺 2002]。そこから、1640年代の江戸には、上方系廻船を造ることのできる船大工はそれなりにいたのだろうとすることができる。

『船鑑』の分析から、関東のヒラタは水押・二枚棚を共通項としていること、海船の影響を強く受けているであろうことが指摘されている [川名 2003]。これらの特徴が「平太式十そう」にまで遡るのならば、1630年代には江戸に上方系造船技術が定着していたことになる。「平太式十そう」が上方系造船技術の江戸導入と南部藩による船大工招聘とを結ぶ糸となる可能性が見えてきたのである。

「平太式十そう」の用意は公儀普請の中のほんの小さな出来事である。だがその背後には、上方系造船技術の受容という汎列島規模の出来事が見え隠れする。今回の大会は、公儀普請のみならず、17世紀前半頃の江戸の造船事情にも大きな手がかりを与えてくれたのである。

註

註1 『船鑑』は「江戸の幕府川船役所が、管下の船統制のための参考資料」 [川名 2003] とするために作成された。関八州および伊豆・駿河の川船と、海船の一部が収録されている。

註2 ○反帆船と言った場合、船の大きさないしは積載量を表す。近世後期弁財船を例にとると、十一反帆で100石積み（約15トン）、十六反帆で300石積み（約45トン）である [石井 1995]。

註3 江戸に下ってきた漁民にとって、「早舟」は重要な漁具であった [東京都公文書館編 1978]。「早舟」は関船の系統であり、水押と棚板を持つ。この「早舟」建造技術が上方系造船技術の導入ルートのひとつとして想定される。

参考文献

- 安達裕之 1985 「近世における廻船の発達」『講座・日本技術の社会史 第八巻 交通・運輸』甘粕健・網野善彦他編 日本評論社 pp.183-215
- 石井謙治 1995 『和船 I』 法政大学出版社 413pp.
- 梶原 勝 2010 「基調報告 江戸城・城下と伊豆石」『江戸遺跡研究会第 24 回大会 江戸城・城下と伊豆石』 江戸遺跡研究会編 pp.7-9
- 金子浩之 2010 「江戸へ運ばれた石材の実態と近世史上の位置」『江戸遺跡研究会第 24 回大会 江戸城・城下と伊豆石』 江戸遺跡研究会編 pp.187-214
- 川名 登 2003 『近世日本の川船研究 上』 日本経済評論社 496pp.
- 川名 登 2005 『近世日本の川船研究 下』 日本経済評論社 491pp.
- 北原糸子 1994 「第 5 章 寛永 13 年江戸城外堀普請 (1)」『江戸城外堀跡 牛込御門外橋誌』 下鉄 7 号線溜池・駒込間遺跡調査会 pp.59-122
- 北原糸子 1995 「第 7 章 伊豆石丁場と都市江戸の構築」『江戸城外堀跡 赤坂御門・喰違土橋』 地下鉄 7 号線溜池・駒込間遺跡調査会 pp.235-289
- 北原糸子 1999 『江戸城外堀物語』 筑摩書房 253pp.
- 白峰 旬 2010 「江戸城普請と石材調達 - 『細川家史料』の分析を中心に -」『江戸遺跡研究会第 24 回大会 江戸城・城下と伊豆石』 江戸遺跡研究会編 pp.11-38
- 東京都公文書館編 1978 『佃島と白魚漁業』 206pp.
- 鳥越多工摩 2007 『近世江戸の「地下室」に関する考古学的研究』 國學院大學大学院 387pp.
- 船杉力修 1999 「伊勢神宮御師来田新左衛門家文書 (一) - 延宝五年江戸・関東御祓配帳 (一) -」『社会システム論集 島根大学法文学部紀要 社会システム学科編』 No.4 島根大学法文学部 pp.1-23
- 船杉力修 2000 「伊勢神宮御師来田新左衛門家文書 (二) - 延宝五年江戸・関東御祓配帳 (二) -」『社会システム論集 島根大学法文学部紀要 社会システム学科編』 No.5 島根大学法文学部 pp.1-31
- 渡辺信夫 2002 『日本海運史の研究』 清文堂 436pp.

部分番号	各部名称	部分番号	各部名称	部分番号	各部名称			
①	サンフタ	棧蓋	⑨	ノシキ	⑬	クワンヌキ		
②	オオギイタ	扇板トモ云	⑩	ドウフナハリ	胴舟梁	⑭	カカミイタ	鏡板
③	ダンノイタ	段ノ板	⑪	コヘリ	小縁	⑮	ト	床
④	チネコ		⑫	ウワダナ	上棚	⑯	モ	モキ
⑤	ツカ	柄	⑬	チソウコハナ		⑰	タテイタ	立板
⑥	オモチフナハリ	表舟梁	⑭	ドウシキ	胴 鋪	⑱	マリクチ	
⑦	ヌキフナハリ	貫舟梁	⑮	ネダナ	根 棚	⑳	コツナキ	
⑧	ナカソウコハナ		⑯	トモフナハリ	船舟梁			

14 修羅船 谷ヒラタト云
石積船 石舟
上口 長四丈(三尺ヨリ)
四丈七尺迄
横一丈二尺迄
根板等兼修羅船
船舟ト云

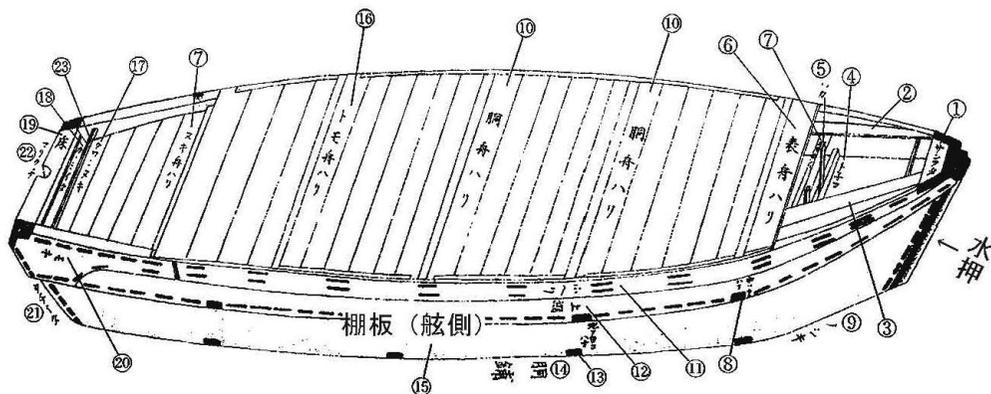


図2 「修羅船・石積船」の部位名称 [川名 2003に加筆]

参加記

江戸遺跡研究会第24回大会に参加して

富田 和気夫

(石川県金沢城調査研究所)

2010年9月19、20日に開催された第24回江戸遺跡研究会大会「江戸城・城下と伊豆石」に参加させていただいた。私自身は会員ではないし、そもそも近世考古学研究のなんたるかもろくに知らないのだが、はるばる金沢から参加してきた労力に免じて記念に感想文を書かせてあげようと世話人の方々にご配慮をいただいたので、ありがたく駄文を書かせていただく。

江戸研で伊豆の石丁場をテーマに研究会を開くことになりそうだと神奈川の三瓶さんから聞いたのは二年近く前のことだったと思う。いよいよ江戸研が動くのかと研究会の開催を楽しみにしていた。

城や城下町等で利用された石材について、近世考古学の分野で議論が活発化してきたのは、一部の先駆的事例を除けば、比較的最近のことである。おそらくその皮切りは2003年の「石垣普請の風景を読む」(東北芸術工科大学) だと思うが、05年には「天下普請を支えた石材の調達—徳川大坂城東六甲石切丁場跡—」(大阪歴史学会)、「石からみた近世文化」(関西近世考古学研究会)と、関西の城と都市を軸に石材の問題を取り上げた

研究会が開かれた。近年では 09 年の「房州石シンポジウム」(同実行委員会)、「高島石の歴史と未来」(東北芸術工科大学)、「近世城郭の石切丁場と石工—北部九州を中心として—」(おおい石造物研究会)等々、近世城郭の石材調達に限らず、石造物生産の観点や都市での消費実態、あるいは個別の地域や石材の歴史的展開を追求するものなど、視点や対象も広がりつつある。

石丁場遺跡の調査事例も格段に増加した。瀬戸内や東六甲など徳川大坂城関連の石丁場を代表格として名古屋城、篠山城等のいわゆる「天下普請」の城郭から金沢城のような大名居城に伴う丁場まで、今や石材調達の実態把握は城郭石垣の調査研究に欠かせないテーマとなった。また、石造物に利用された凝灰岩等の石切場の発掘調査事例も、西日本を中心に蓄積されつつある。

そのような研究動向の中でようやく、いやいや満を持して開催されたのが本大会である。梶原氏の基調報告にあるように、主に城郭石垣(つまり江戸城)に係る石垣用材の生産と流通を主題としつつ、用語や概念の整理にはじまり、石材加工や運搬などの技術的問題や、刻印・標識石等の石丁場遺跡に特徴的な諸要素に関する調査研究の現状整理と情報の共有化をメインに据え、石材の規格化や労働編成をも視野に入れて、さらには江戸市中で多用された凝灰岩系の軟質石材も検討の遡上にあげるといふ、さすが江戸研らしい総合的な構成の研究集会であった。生産地・伊豆と消費地・江戸の双方を車輪の両輪のように取り上げ、調査研究の現状と課題を共有することで「石丁場遺跡の周知と研究の深化」に役立てることが目的であるとされていたが、それだけでなく石材のもつ歴史的意義を議論するなかで、江戸遺跡での発掘調査や研究のあり方に一石を投じること狙いだったに違いない。

当日は 12 件(紙上発表含む)の、いずれも意欲的な発表に触れ、刺激的で充実した時間を過ごすことができた。頭を駆け巡ったことはたくさんあって、とてもおいそれとまとめることはできそうにない。

伊豆の石丁場からもたらされる情報は実に興味深く、その範囲の広さと密度の高さ、保存状態の良さには圧倒された。瀬戸内を中心とする広域な花崗岩地帯の各所から石材調達をおこなった大坂城に対して、一部の花崗岩を除いて伊豆半島周辺に一極集中した江戸城。石材調達の西と東の特性差は、硬質石材の偏在という関東の自然的条件を前提としつつも、単にそれだけにとどまらない様々な要因を考えさせる。

幸いなことに伊豆の石丁場は東京から離れているし多くが山林であるため、戦後の大規模開発の波の直撃を受けることなく保存良好である。近世の石材流通をめぐる諸問題に関して、大都市江戸を支えた伊豆の石丁場がよく残っていることの意義が大変に大きいことは、歴史関係者なら誰しも認めるところであろう。

そして、石丁場遺跡の秘めた可能性を十二分に発揮するためには、文献研究はもとより、石丁場の遺構、遺物に対する考古学的なアプローチが重要であることも言うまでもない。発掘調査された石丁場遺跡は、まだごく一部で、現況観察が調査の主体である。発掘に比べて取得しうる情報に限りがあるのは当然のことだが、それでも分布調査と現況把握から膨大な情報をもたらされている。一方、石丁場遺跡の現況は稼働期間の長短こそあれ、複数時に及ぶ採石活動の最終段階の姿である。さらに採石が終了した後でも諸大名の委託により丁場や残石は管理の対象とされていた。こうした石丁場遺跡を巡る特徴的な要件は、実際には遺跡や遺構にどのような形で反映しているのだろうか。今後は、石丁場という遺跡特性を踏まえた調査と資料分析の方法論についても、議論を重ねる必要があるのかもしれない。

伊豆の凝灰岩丁場の実態把握もこれからの課題のようだ。硬軟あわせた石材産地であることが伊豆の大きな

特徴であるし、近代に入って全国的に急成長する石材産業の発信源の一つが伊豆であるとされている。凝灰岩丁場の実態把握なしには、日本の石材技術史上に占める伊豆の意義は語り尽くせない。

一方、伊豆に限らず金沢でも言えることだが、石丁場の考古学的な調査で課題になるのは時期比定の方法である。伊豆の石丁場に特徴的な標識石等の豊富な文字資料は重要な情報源であることに違いはないが、土中に埋没していたものではなく露出状態であるだけに、考古学的方法で検証しておきたいところであるし、標識石と現存する遺構の対応関係についても検討を要する。石丁場には石材生産の各工程を止める未製品・欠損品に加えて、ほぼ製品状態の石材すら残置するから、これらの分析を通じて様々な情報を引き出すことが可能だが、いかんせん発掘調査しても相伴遺物に乏しく時期特定には限界がある。

その点、消費地での石材は、程度の差こそあれ時期を特定する資料に恵まれている。石材流通の過程での追加加工や、消費され廃棄されるまでの再加工や転用等、生産地と消費地の石材の対比には検討すべき課題もあるけれども、消費地での石材の種類や用途に応じた加工技術や寸法形状の規格性、それらの時期的な変遷や背景等、消費地での調査研究に期待すべき点は多い。

本来ならば、近世遺跡から出土する「石材」は自然遺物ではなく人為的な加工品として取り扱うべき性格のものを多く含んでいる。しかしながら、石は概して、装飾性が薄く地味で規格的でありふれていて、なおかつ大きく重たい。石造物は遺物として取り上げても、素材としての石材は未だ遺物としての市民権を得るに至らず、「土砂並」に扱われて発掘現場の片隅で処分を待つ姿も珍しくはない。取り上げや収蔵の手間や経費まで考えると、現実的な対応をせざるを得ないという訳だが、加工品である以上、せめてサンプルを保管する「瓦並」の扱いは当たり前になってほしい。そのためにも、裏付けとなる調査研究の蓄積が求められているということであろう。

消費地での石材利用の調査研究が進み、石材が果たした歴史的役割が遺跡に即して具体的に明らかにされてこない、生産遺跡の保存活用も進みにくい。消費地における調査研究が果たす役割と生産地側からの期待は、江戸研の皆さんが想像している以上に大きいのである。

最後になるが、本大会の 220 頁余の発表要旨は江戸と伊豆の石材研究の現在の到達点と課題を指ししめず論文集として、関東に限らず全国の石丁場に関心を寄せる者達の必読の書と言っても過言ではないだろう。城郭石垣をはじめとする石造遺構や石造物研究者にも一読を勧めたい。毎年の大会でこのような充実した発表要旨を当たり前のように世に送り出すことができるのも、さすが底力のある江戸遺跡研究会ならではのことだと思う。この大会を期に江戸遺跡での石材利用の実態解明がより一層加速することを期待してやまない。世話人の N 氏は「江戸研で石を取り上げるのはこれが最初で最後だろう」などとつぶやいていたが、いやいや、おいしいテーマや情報はまだまだありますよ。数年後とは言いませんが、いずれ続編「江戸の石」が開催される日を楽しみにしています。

講演会・第128回特別例会のお知らせ

江戸遺跡研究会は、例年1月末頃に大会を行っていますが、今期は9月に『江戸城・城下と伊豆石』を開催いたしました。来年は、講演会と通常夏に行っている特別例会を、**2011年1月29日（土）に東京芸術劇場大会議室**（9月に大会を開催した場所です）にて行う予定です。

講演会には、昭和44年の第35回日本考古学協会総会にて、近世考古学を提唱された加藤晋平先生をお招きして行う予定です。また、第128回特別例会は近年の近世考古学に関連した報告を予定しております。詳細は次号（125号）でお知らせいたします。

皆様ふるってご参加ください。